18

日本医学専門学校の学生騒動の端緒となった瀧澤竹太郎と磯部検三との闘争

殿﨑　正明，唐沢　信安，志村　俊郎，山本　　鼎
日本医科大学 医史学研究会

日本医学専門学校で大正 5 年に生じた学校騒動の原因の一つとなった磯部検三と瀧澤竹太郎との闘争に至ったその過程について新たな知見を報告する．

瀧澤竹太郎　信州戸倉出身，瀧澤甚平次男，安政 6 年（1859）12 月 20 日生．明治 37 年 4 月眞泉病院を開院，明治 40 年 11 月，明治 43 年 11 月の 2 期本郷区議会議員を務める．磯部との闘争に敗れて日本医専を去り，眞泉病院は元に復したが指導的教授や医師達が去り，維持費が重なり本郷三丁目の東海銀行から借金，高利貸しにより病院を競売．精神不安定となり根岸病院に入院．大正 7 年 3 月 18 日死去する．

眞泉病院　根津神社隣り，根津須賀町 7 番地に，明治 36 年 10 月 11 日の東京朝日新聞に，瀧澤竹太郎が根津紫明館を改築し本郷医院を設立するという広告を出す．翌明治 37 年 2 月 26 日の同新聞に本郷医院を眞泉病院と改めて「来る 3 月 1 日根津紫明館改築　東京本郷根津　眞泉病院開院」なる広告が医学博士千葉稔次郎（山口県出身 , 東大明治 20 年卒），医学士中島襄吉（東大明治 29 年卒）の連名で掲載された．二人は，医科大学教授及び助教授の職を辞して産科婦人科病の治療に従事すると紹介している．その他の科の担当としては，内科学山根正次（山口県出身，東大明治 15 年卒），野村花造（東大明治 35 年卒），薬局主任として藤本 理（後に名古屋薬学校校長）の名前があり，眞泉病院が日本医専眞泉病院として広告が出るのは大正元年 11 月 2 日の新聞からである．建物は二階建 400 余坪，敷地 2,000 余坪，院主 瀧澤，院長 千葉，明治 40 年 医員 10 名，入院患者男 115 名，女 311 名，外来患者男 245 名，女 470 名であった．済生学舎講師をしていた石川清忠（済生学舎第 1 期生 , 明治 10 年卒）は，明治 34 年から明治 37 年迄本郷区会議員を勤め同じ区会議員をしていた瀧澤と親しくなり，当時眞泉病院は目と鼻の先にあるほぼ同時期に設立された石川の経営する私立東京医学校（明治 37 年 4 月設立）の実習病院となっていた．瀧澤は医者ではないので石川を介して山根に相談して医師を揃え開院したものと想定される．

瀧澤竹太郎の協力　明治 43 年 3 月 9 日，私立東京医学校と日本医学校が合併して日本医学校となった．校長山根，理事石川，主幹磯部という布陣であった．明治 44 年 1 月，瀧澤・山根の協議で財団法人日本医専の附属病院となるべく眞泉病院を提供し，明治 44 年 5 月 8 日専門学校設立願提出するも 9 月 25 日不認可．明治 45 年 1 月神田淡路町校舎を日本病院として開院し，改めて明治 45 年 2 月 8 日，文部省に財団法人の財産として眞泉病院 18 万 5 千円，校舎・設備 7 万 3 千 8 百円，合計 25 万 8 千 8 百円あることを届け出，筆頭磯部，次瀧澤名で専門学校設立願を再提出し，7 月 10 日に財団法人日本医専が認可される．校長山根，瀧澤は石川に代わって財団法人日本医専の専任理事となる．大正元年 9 月 11 日，日本医専始業式 100 名入学．大正 2 年 3 月，本科生 100 名，中国留学生 30 名募集し，同窓懇話会を設立，学生会例会が活発化する．この時点では両者の争いは顕在化していない．

瀧澤竹太郎と磯部検三の闘争　突然表面化した両者の闘争は，磯部は，日本医専は日本医学校が昇格したとするのに対して，瀧澤は，日本医専は日本医学校と何等関係なしと主張し磯部派の勢力を排斥した．磯部は，大正 2 年 12 月朝鮮に赴任している山根に報告し理事会に付して進退を諮る．瀧沢は磯部に代わり石川を専務理事に推すも不成功に終わり，大正 3 年 5 月 8 日理事会は瀧沢の理事退任，日本医専へ寄付した財産を瀧沢に返す事を決議，同年 6 月 24 日上記を文部省に届けて山根校長は辞任，前眞泉病院長青柳登一（東大明治 35 年卒）が校長となるも 2 ヶ月後 8 月に青柳校長・教授辞任，磯部が学監となり権力を一手に掌握した．

結論

磯部は，瀧沢から庇を借りて母屋を取ることに成功した．